

多職種介入が心臓リハビリテーション動機づけに奏功した一例

南多摩病院 ○山田健嗣、倉田考徳、関 裕、中嶋直久、杉安愛子、佐藤琢紀、菊地より子
松村 佳、樋口隼介、今吉 慶

【はじめに】

心疾患発症後の患者は自己の身体能力に対する認識が不十分であることが多く、日常生活において身体活動量が低下し過剰な心理的ストレスを抱えているといわれている。そうした疾患の治療を通して心臓リハビリテーション（以下心リハ）という治療法の重要性を理解してもらうことは、患者が自身の病態に対して意識を向上させ、不正確な認識を是正するために重要である。今回、3度の心筋梗塞を発症し初めて心リハの目的を理解され、当院での急性期から維持期までの心リハプログラムへ参加することができた症例を経験した。その過程において、参加意欲を維持する因子と今後の当院の課題を検討したので報告する。

【症例】

78歳 男性、診断名：急性心筋梗塞（下壁）、過去にも2度心筋梗塞の既往があるがリハビリ経験はなし、冠危険因子：脂質異常症のみ

【方法】

急性期から患者と問題点を共有し、多職種によるチームアプローチを行った。回復期～維持期にかけては外来リハビリにて定期的な評価を行い、患者にフィードバックすることで心リハに対する意識を高めた。

【結果】

急性期から維持期にかけて心リハに対する意欲を維持することができた。その結果、運動耐容能、心理的ストレスの改善がみられた。

【考察】

患者自らが治療に取り組む姿勢を獲得するためには、急性期からの多職種による介入と患者の運動耐容能を正確にフィードバックし自己効力感を高めることが必要である。また、心リハに対する動機づけをより高めるためには、呼気ガス分析装置を使用した心肺運動負荷試験で得られる結果を運動処方作成に活用し、患者に治療効果判定を伝えていくことが必要であり、今後の当院での課題である。